

〔第168回明専塾（日立製作所）〕

「社会」と「技術」

工学府先端機能システム工学専攻M1 中村 太郎



平成30年12月21日、戸畑キャンパスにおいて第168回明専塾が開催されました。参加人数は講演会が69名、懇親会が64名でした。講演内容は日立製作所が行っている事業の紹介とその仕事の概要でした。

日立製作所は小平浪平さんが五馬力モーターを開発して以来、総合電機メーカーとして日本の産業発展に貢献し続けました。そして、現在では、総合電機メーカーとしてだけでなく、社会インフラ創業企業として電力・エネルギー・金融・ヘルスケア・水・交通・アーバン（都市開発）など様々な領域において社会イノベーション事業を推し進めています。したがって、このような数多くある

事業の中核である研究や開発を行っている先輩方のお話は、私にとって非常に貴重な時間でした。

講演の中で最も印象に残っていることは、「社会」と「技術」の関わり方です。講演の中でお話があった風力発電事業を例に取ってみると、その事業はIT技術やエネルギー技術などの多くの技術を駆使して開発がされているそうです。しかし、その根幹にあるものは世界的な資源問題を解決し、より安定した電力供給を行いたいという想いでした。近年、IT技術や人工知能分野における発展は目を見張るものがありますが、「技術」が「社会」を支配するのではなく、「技術」と「社会」がともに歩んでいく、そんな未来を目指しているように感じました。また、「社会」を大切にする企業の方針は、社員の働き方にも現れているように感じました。産業・流通ビジネスユニットの合田さんのお話によると、日立製作所のシステムエンジニアは

従来の一括請負型システムエンジニアの働き方とは異なり、ソリューションの提供を一番の目的としているそうです。『社会の課題として顧客が存在し、一緒になって解決方法を模索する』という方法は現在、急速に普及が進んでいるIoTの先駆けとして新たな働き方を提案しているように思いました。

中村百周年記念館で行われた懇親会では、和やかな雰囲気の中で立食形式の事を楽しみながらOBの方々と懇談をしました。そこで私は日立製作所で働いてからのことをより詳細に聞くことができました。その中で最も衝撃を受けたことは、入社して間もない頃から仕事を任せられるということでした。何をすべきか、あるいは誰を頼るべきか完全には理解していない中で日立製作所の一員として働くことで他者と切磋琢磨し、自ずと自分の社会的役割を理解することができるとおっしゃっていました。これは、新入社員にすぐに仕事を任せられるほどの確かな指導と、新入社員がそれに応えるための知識と技術を持っているためだと思えます。私もエンジニアとして社会を支える立場になった際に、一日でも早

くその企業の一員として社会に貢献できるように、より真摯に自分の研究を進めたいと思いました。

最後になりましたが、この場をお借りして、私たち学生のためにご講演してくださった佐野貴彦氏（電59卒）、合田佑司氏（電シH26卒）、伊多倉京士朗氏（M機H24卒）、中嶋繁夫氏（M生生H23卒）と、このような貴重な機会を設けていただいた明専会の皆様に心より御礼申し上げます。

（平成31年1月記）



懇親会の様子